

《参考》OB会創立に関する辻井先生の文章

## 私のつくったOB会

新制高校になったばかりの神戸高校の先生として私は転任してきた。昭和24年の秋のことである。

3年生は、2回生の中村君だけが部に顔を出していた。私は着任早々、第4回国体(東京)に選手として出場した。部員の試合としては、12月25日にあった県高校駅伝が最初であった。姫路から県庁までの本当の駅伝競走だった。

そのあと、主将が2年の安田君(3回)に引き継がれた。この時の1年生は、悲劇の学区制の学年で、700人もいた。

---

神戸高校は、旧一中ではない。また、私の県一高女でもない。新制のこの神戸高校が如何にあるべきか、運動部はどうあるべきか、など探り探り前進していた時代であった。

私の部員はどう育てていけば良いのだろうか。よその子ほど強くないのは何故か。そんな何年間であった。

そのうちに、全国大会に出場できる者も現れてきた。無念の涙も見た。強くなれない者もあった。何人もの部員の3年間の経験を土台にして、つぎの部員にそれを生かしていく。

生徒の成長によって、私が神戸高校の先生としての成長をすることができていったように思う。

---

彼らの3年間は、彼ら一人一人だけのものではない。また、上下の5年(上2年・下2年)の知り合いだけで終わるべきものでもない。

卒業してからも、何年経っても、部の中に生き残る、そんな部活動にしていかなければならん。自分の誇り高い3年間と同じような部活動を、新しく入ってくる部員にも味合わせてやろうとしてもらいたい。自分の果たせなかった夢を、自分につながる後輩たちによって達成してもらい、その喜びを分かち合ってもらいたい。

神戸高校陸上競技部が、永遠に生きるために、部に繋がるみんなを一つにまとめた会を作ろう。

少なくとも、新制高校の2回生からの部員は、全部、私と一緒に時を過ごした諸君なんだ。そのみんなの会を作ってOB会としよう。

私のメモの中にだけしか残らなかったかも知れないメンバーをならべた。全くの私の独断で作ったOB会であった。

---

当初の私のOB会の構想はこんなものであった。

会長とか、定款みたいなものは、無かった。

世話人がいて、私との連絡を密にしてくれればそれで充分。

皆が集まった時には、一番年長者が、はじめの挨拶をしたら良いだけだ。

OB会の総会などの連絡は、大学4年生(相当)学年の輪番制にしよう。

連絡世話人として、西本君（11回）に白羽の矢を立てた。神戸商大生になったばかりだった。

西本君は、部報発行の頃を見はからっては現れた。OB会への連絡事項と金1,000円也をもって来た。当時は開き封は8円で送ることができた。

---

やれ会長だ、やれ幹事だ、やれ会則がどうのこうのと、皆がえらそうなことを言うようになったし、仕事が忙しくなったこともあって、西本君は身をひいた。

それからは、私のOB会は、一人歩きをしてしまった。ご立派だけれども、どうも気に入らん方向へ進んでいるように思われてならん。

皆、一体何をやりたいんだろうか。

OB会は、OBの親睦会ではないと私は断言したが、総会の時に、故岩崎君の追悼のために、エピソードを披露したって当たり前のこと。

私が皆にしてやったようなことを、現役部員にさせてやれと言うたが、OB会には、無尽蔵に金のなる木があるわけがなし、何をどうするべきかについて、大いに考えるべき危機のはず。

---

私は、部員を、皆、自分の家族のつもりでつきあってきた。だから、皆は兄姉であり、弟妹であるつきあいをしていくものと思っていた。

たとえ、何十歳離れていても、皆、同じ神戸高校陸上競技部員だったという仲間である。単なる「辻井一家」として、孤立し、消えていくようなOB会を作ったつもりはない。

永遠に続く「家族」の会をつくったつもりだったのだ。

新OBに渡した帯達磨の「帯」は、連帯の意味。片目の達磨のあの理想の世界を目指したOB達のシンボルのはずだったのだ。

（原文のまま）